

Book Review



Cr-Br 咬合のルーツ ～Gnathologyと対峙した 石原咬合論・顎頭安定位と全運動軸～

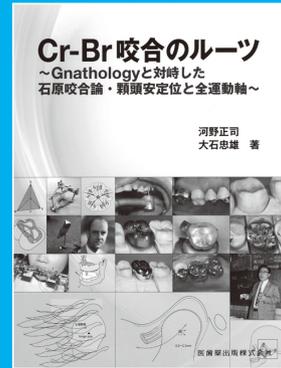
河野正司・大石忠雄 著



Reviewer

長谷川成男 Shigeo Hasegawa
(元東京医科歯科大学歯学部教授)

A4 判変, 136 頁
定価 (本体 5,200 円+税)
医歯薬出版刊



まず、副題にある Gnathology, 石原咬合論という文字をみて、昂奮を覚えた。

本書の著者は「全顎運動軸」で知られる河野正司先生と「顎頭安定位」で知られる大石忠雄先生であり、両先生が石原門下生の俊英であることから快著を期待して一読に及んだ。

石原寿郎先生は 1950～60 年代に多くの研究者を集めて、史上最高の咬合学研究グループを主宰されていた。歯に加えて歯周組織・筋神経系・顎関節などで構成される顎口腔系という言葉はもちろん、その概念を咬合学の分野に導入して、今日のクラウン・ブリッジ補綴での咬合の礎を築かれた方である。石原先生は同時に、この咬合の概念を概念に留めず、当時臨床で通法となっていたバンドクラウンをキャストクラウンへと革新し、広く普及させることによって日々の臨床での咬合理論の実現への道をも拓いた。この辺りは

本書に詳述されているが、キャストクラウンの導入によって正しい咬合理論に基づく咬合面形態、自分の考えに応じた咬合面形態がワックスに彫刻するだけでクラウン・ブリッジ補綴物に実現できるようになったのである。

本書の著者らはその延長線上にあって、同様の視座から多くの実験・研究を重ね、理論構成を行い、成熟した形で、このたび石原咬合理論に加えての本書を上梓したものと思われる。

本書の特徴は研究成果と臨床術式との絶妙な組合せで、向上心のある歯科医師には必ずや臨床での有力な羅針盤となることであろう。難しいことは易しく、易しいことは深く、そしてこれまでに読者から受けた質問に答える形式での筆致はビビットで理解しやすく、類書にはみられぬ親しみやすいものとなっている。

副題にあるもう一方の咬合論である Gnathology, つまりカルフォルニア

生まれのナソロジー学派は 1926 年の創設であるが、1960 年代には一世を風靡していた。その理論には首肯すべき点もあるが、一方であまりにも機械的に過ぎるという批判もあって、各所で他の学派とのバトルロイヤルが展開されていた。

ナソロジー学派はクラウン・ブリッジ補綴の咬合という観点から歴史的に必要な 1 つのステップであったのか、否か、これは正しく評価しておかなければならないことである。咬合を学ぶ方には、こうした視点からぜひとも目を通していただきたい。

咬合学の書籍というと硬質のイメージが付きものであるが、著者らの学生、院生時代からの回想、研究に関する驚き、苦しみ、歓び、そして石原先生への敬愛の念などが随所に挿入されていて、興味深く、一気に読み通せる。正月明けにきりっと、広く江湖にお薦めしたい一冊である。